Meisei University

# グスタフ・マーラー

アンリ＝ルイ・ド・ラ・グランジュ

丸山正義*訳

**5（承前）**

**過渡期**
**不安定、貧困、情熱**
**ヨゼフィーネ・ポイスル**
**社会主義者・菜食主義者マーラー**
**リーピナーとの出会い**
**(1878-1880)**

金銭の不如意、身分の不安定、将来に対する不安、すでにこれだけでマーラーを心身ともに衰弱させるのに十分であろう。ところで彼が将来を悲観的に見るのももっともなことで、同じ時期、彼は初めて大人の恋愛を体験する、その相手はイーグラウの郵便局長の娘で、ヨゼファ、つまりヨゼフィーネ・ポイスルだった[21]。しかし、この恋愛は決して結婚へと至ることはありそうもないものであった。クリスパーの手紙によると1879年9月以降マーラーはすでに恋に落ちていることがわかる。《僕はバラの茂みに傷ついた幸せ者の中でもっとも不幸な者だ》と当時の彼は慨嘆している。《新しい一つの名が僕の心に入ってきた、呟きながら、顔を赤らめながら、しかし力強く……。僕は本当に馬鹿だ、何て動揺しているのだろう、これ以上書けない、[……]。》

1880年2月、マーラーは相変わらずクリスパーに手紙を書いている、開いたままの本に囲まれて。《半時間も前にこの手紙を書いたのなら、また嗚咽に捉えられ便箋を涙で濡らしたことだろう。今は落ち着いている……。僕の中にこれ以上の落ち着いた言葉を見出せるようになるとは、初めてのことだ［……］。》

《そう、僕は神々の「寵児」の甘き絆に苦しくも完全に巻かれてしまった。そして主人公は、今や、ため息をつき、絶望的に両手を捩り、うめき、泣き、等々。想像しうるあらゆる方法で、何とも心地よい苦悩で、おのれ自身を苦しめるために最大の時間を費やした、本当に。僕はああと言って起き、おおと言って寝た。夢うつつとはこのことだ、目覚めたまま夢を見ている[22]［……］》(1879年12月14日)。この手紙の先にある文章はまさにホフマンのクライスラー楽長だ、《この大嫌いな微笑みにはもう飽き飽きだ、僕は、強いてもっと快活な文体、もっと田園調の文体を採用しなければ。それはあのやたらなれなれしいなつかしのラメントに再び陥らないためにも。これ以上嘆くこともしたくないし、あまり笑わないでい



* 一般教育　教授　フランス語

NII-Electronic Library Service

Meisei University



ようとも思わない。頭の中には悪罵と呪詛の騎兵隊が駐屯しているので、やつらをぞろぞろ並足で送り出したい。「悪魔め、このずた袋を持ち去ってくれ」 僕の目は古びたレモンみたいに乾ききって、もう一滴の涙もない。じっさい僕はこの世のありとある憂愁を味わい尽くさねばならない、どんな例外もなく。そのどれ一つだって僕には免除されはない！》この手紙を閉じるにあたってマーラーはクリスパーに後で彼の謎めいた苦悩のすべての原因を説明すると約束している。

この年マーラーが体験した不幸な恋愛を明らかにする未刊行資料が残されている。1930年、彼の妻が夫の残した書物の間に挟まれていた小さな肩掛けバッグの中から発見した。彼女は、その時までまったく、あけてみようなどという好奇心をもたなかった[23]。このバックに含まれていたものは、マーラーの両親や妹たちの手紙のほか、ヨゼフィーネの母であるファンニ・ポイスルの手紙三通、彼女の姉妹アンナの手紙一通、ヨゼフィーネその人の手紙二通、それに加えて、フランツ・メリオンというイーグラウ高校の補助教員の手紙二通、この人物はこの恋愛で、相談相手、仲介役を演じていたようだ。その他、マーラー自身の手紙、ファンニ・ポイスルに宛てた一通、ヨゼフィーネ宛二通の三通に加え、彼自身が書いた家族らの誕生日や聖人の祝日のリストと、最後に、この「相聞牧歌」に終止符を打つため娘の父がマーラーに宛てた手紙が一通。

1879年の夏の間、イーグラウで、ヨゼフィーネとアンナのポイスル姉妹はマーラーのピアノの生徒だった。彼女らはイーグラウという地方都市の若いブルジョワ達がおくる典型的な生活をしていた。2月25日の手紙で、アンナは、おそらく彼女は妹であろう、謝肉祭のおり、ホテル・チャップで開催された舞踏会のこと、駐屯部隊の士官達と踊ったカドリールやギャロップのことを語っている。ヨゼフィーネの最初の手紙は、アンナより少し後で書かれたものだろう、彼女もまた彼女が行った舞踏会や演奏会を列挙し、マーラーが、［ウィーンへ］帰る前日に、《熱意溢れる騎士殿》を演じた夜会の思い出を語っている。ただし、これはマーラーの踊り手としての才能に関して私たちの持ちうる唯一の証言である。さらに彼女は声楽の勉強のことを語り、多分マーラーが勉強するように進言したのだろう、『さまよえるオランダ人』のことを語っている。彼女は、またピアノのレッスンをしてくれるためにイーグラウに戻る決心をいつして下さるのか、とマーラーに尋ねている。

10月17日と11月14日のファンニ・ポイスルの二通の手紙で、この母はウィーン在住の息子であるオットーを訪ねてくれたマーラーに感謝している。この息子は《運命にひどくもてあそばれた》のだった。11月25日の手紙でファンニはマーラーの手紙が悲しいととがめている。《だからあなたが輝かしい帝都ではなく、地球の暗い片隅で失敗してしまったのだと、容易に察しがつきます。あなたのように才能を与えられた若者が、どうしてこの社会の慣習や冷酷さに取り巻かれたままでいられましょうか、いつもいつも孤独を求めてばかりしていられましょうか。そんな気持ちは年寄りに任せなさい、あなたは青春を謳歌するのです！……》ファンニ・ポイスルによると、ヨゼフィーネとアンナはいつもダンスばかりして、ピアノと歌の勉強を放り出し、若い教授達の威圧的な髯を賞賛し、スケートリンクに通いつめている。3月の初めファンニはこの若い音楽家に慣例的な挨拶状をいくつか送っているが、大ニュースとして、娘達が今度はウィンナ・ワルツを習い始めたことを知らせている[24]。

これらの手紙からわかることは、誰もがイーグラウでのマーラーの恋愛感情を無視してい



NII-Electronic Library Service

Meisei University



る、というか無視したがっている。《急変》は3月になってついに爆発する。18日、マーラーはヨゼフィーネに彼女の聖人祝日のお祝いを言うために手紙を書いている。《お嬢様、あなたは無情にも沈黙を守っている、つまりあなたは僕に良い感情を持っていないということでしょう。でも、この手紙が風のまにまに捨て去られようと、僕は決めました、心底、あなたに明日という日のために僕の希望を送ることを。

《僕は自分自身の手でどんなにかあなたにこの希望を渡したかったことでしょう。約束を守るために、イーグラウで復活祭の休暇を過ごす誘惑に負けまいとする努力、僕がやらなければならなかった意志の力には僕はまったく驚いてしまう。僕の同僚達が楽しげにイーグラウの街角を散歩しているのに僕は部屋にこもって、窓の向こうに春が到来していることもほとんど気付いていないと考えると、いま僕の心の中には、どんなに不安が引き起こされていることか。僕は北極の氷河すべてに覆われることでしょう、そして僕の無礼な願望は、それが生み出された場所に送り返されることでしょう。でも驚かないで下さい、ひょっとして、そんな小妖精の一つ二つ、あなたの部屋に侵入したとしても。

《心配しないで下さい、あなたにどんな悪さもしませんから。軽くてふわふわしてやさしんです、ちょっとした場所さえあれば満足なのです。

《夏休みが来れば、こんな僕の禁欲主義は報われます。そうすればまた僕はのらくらしよう。あなたは僕がどれくらい怠惰になれるかご存じです。そして音楽や昔話、他のお勉強がまたまたあなたに浴びせられます。

《もう僕たちは樅林の中にいるみたいに思われます、小さな家の中にいて、そしてまた、屋根裏部屋の窓辺にいるのです、雨が来るのを待ちながら。僕はあなたにジークフリート、不死身のジークフリートが、魔法の眠りに眠らされたブリュンヒルデを目覚めさせるお話を、鍛冶屋ヴィーラントは王女バチルドを奪うために鉄の羽を鍛えるお話を、そして昔の神々のお話を、暗いヴォータン、永遠の若さを与える黄金のリンゴを守る美しいフライア、ハンマーを持って血気にはやるドンナー、巨人たち、指環、夜行性の小人、ニーベルンゲンたちのお話をするのです。そして僕たちは雨の中を町まで、家まで駆けってゆく、そのまま天守閣の頂上まで登ってしまうのです。突然僕たちは一つ歳をとっている、それを除けば、僕たちはいつも同じ、僕はそれを望みます！

《これはみんな僕の想像です。そうやって僕は現在を忘れるのです。僕の欲望はどんよりとした現実の上を飛翔する。でももう僕にはあなたの聖人祝日の日に幸福の祈願をあなたに送ることしかないのです。この手紙とともに春のことづけがそのご主人様「春」の到来を告知しに来ることでしょう。そう、春そのものは二日後の3月21日に来ます……》

マーラーはここではちょっとひょうきんな調子をとっている。しかしそれでも心の揺れは前年の散歩の話や他のところでも透いて見えてしまう。ヨゼフィーネは3月26日に冷たい慣例的な調子で答えている。何も、まったく何もイーグラウではおこらない。そり滑りもコンサートや他の気晴らし同様冬に終わってしまった。今は田舎に遠出して魚やザリガニを釣る用意をしています、と。ポイスル夫人はマーラーの希望で復活祭のケーキを作った。彼はこれを若いオットーとわけることになる。

ところが3月3日以降、マーラーは彼の希望が無益なものであることに気が付いていたようだ。その日彼はアントン・クリスパーに宛てて *Vergessene Liebe*［《忘れられた恋》］と



NII-Electronic Library Service

Meisei University



いう詩を書いている、この詩の役割は《彼の心の中で生起するものよりもより顕わにする》ことだった[25]。ところでこの詩には以下の詩句が含まれている。《昔、きみの目には何と輝かしい忠実な光が輝いていたことか！　冬の悪意にもかかわらず、私の放浪の道筋は終わった、そして春が来るとすぐに私の愛は彼女のブロンドの髪をミルテの花冠で飾った。》

この詩の文面から察すると、ヨゼフィーネはいつの日か結婚のことを話す気になったかもしれない、いずれにしてもマーラーの気持ちを理解し彼を鼓舞したように思われる。『忘れられた恋』の文体は前年の夏に書かれた二通の手紙の文体とそれほどの共通性はない。すでにこの詩はフォークロアからその詩情を得ており、ヨゼフィーネに献呈された未刊の三つの『歌曲』の詩[26]と兄弟のようにそっくりだ。しかも、1884年の『さすらう若人の歌』の歌詞にも似ている。そこここに散見する慣用的な表現（《永遠の責め苦》、《寂しい心》、《愛の苦しみ》）を除けば、ここには相変わらずさまよえるユダヤ人のほのめかしがある（《私の旅の杖》）。とはいえ、1880年3月に書かれたすべての詩の、その基本的なテーマは「さまよえるユダヤ人」ではない。中心テーマは人間の苦悩と自然の喜びの対立で、この主題は後に『さすらう若人の歌』で主役を演じることになろう。まだ『子供の不思議な角笛』を見つける以前、20歳の時、詩人マーラーはすでにこの民謡詩集の《調子》、文体、そのお気に入りの主題の一つを模倣している。

《僕はなんて孤独なんだ、君に会いたいです、君のそばにいたいです》と、マーラーは1880年3月14日にクリスパー宛に書いている。《この先こんなことに耐えていられるのだろうか。常に挫折しているような。戦いはしなければならないし、終わりそうもない。ただ、今君に説明をするわけにはいかない。初めてだ、世界が僕を引捕らえた。世界は僕を物質の虜にした。昔ながらの陳腐なことども、言い古された良き女房のお話、僕は今まで憐憫のほほえみでそれらを聞いていたのだ、それらが僕をひっつかまえて僕に魔女のロンドを踊らせるのだ。今まさに、あらゆる大波がいちどきに僕を襲ってくる！》

拒絶された愛する男は、このような真摯で深刻な苦悩の中にいると、暴露趣味的な傾向を示してしまうのが常だ。しかし彼は自分の置かれた状況のばかばかしさに気付いている、そしてそのことを苦々しく思うのだ。3月25日、ヨゼフィーネに宛てた最後の手紙から一週間後、マーラーは相談相手のフランツ・メリオン[27]から次のような葉書を受け取る。《親愛なるマーラー。今、事態は特にうまく行っているというわけではない。でも、僕を信じてくれ。僕には事態が好転するようにはおもえない。明日、また書く。メリオン

《追伸。Jは籠［婚約者の贈る贈物］を受け取った。でもA（アンナ）によれば、Jはあまり喜ばなかったらしい。彼女はヴァルナーを愛しているようだ[28]。》ヨゼフィーネはどうやらすでにヴァルナーの気配りに答えているようだ。この人物は高校の教授であり、後に彼女と結婚することになる。二日後メリオンは葉書がもたらした印象を打ち消そうとつとめ、電報を打つ。《雲は晴れた。彼女たちに手紙を》[29]

マーラーは即座に従った。29日、ファンニにお菓子の礼状を書き、それとなくヨゼフィーネの態度が冷たいことを嘆く。《まさしく私はこの世にいる誰かに私のことを思い出してほしいのです。本当に春は約束をきちんと守ってはくれません。私の精神状態は宗教裁判で生きながらに火刑台で断罪されてしまう人、最後の瞬間に、絞首刑を恩赦される人のようです。火あぶりの苦しみを免除してくれるのなら感謝しなければなりません。》



NII-Electronic Library Service

Meisei University



おそらくヨゼフィーネの両親はしばらく前から事態はまったく別の方向に行ってしまった、と判断していたに違いない。聞き分けの良い娘として彼女は両親の話に従ってもう手紙を書かない約束をした。彼女の沈黙はマーラーの気持ちを爆発させてしまうことになる。《私の永遠に愛する人、絶望が僕に次の文章を書かせるのです。まさか、あなたはもう僕たちがかわした約束を忘れてしまったわけでありませんね。ああ、僕は何と言ってよいのか本当にわかりません。僕の心から流れ出る言葉は、僕の心の中で沸々とたぎるものと比較すると、氷のように冷たい！

《ああ、かつてないほど、僕の願望が成就し、――おお、ねがわくはそのように言う権利が僕にあらんことを！――僕たち二人が熱烈に願ったものが実現するのにこれほど近づいたときはない、このときにこそ、まさしく今、それがなされんことを！

《かつて一度も僕は人の前でへりくだったことはなかった。それが今見て下さい。僕はあなたの前で跪いている。あなたにとって大切なものすべてにかけて、かつてもし、あなたが私に対してほんの少しでも愛のきらめきを感じたのなら、――お願いです――僕が絶望の淵に暗く沈み込んでしまわないように、命のしるしを僕に下さい！　たとえそれが何も書かれていない葉書であっても僕の住所さえ書いてあれば、僕はそこにあなたが僕のことを忘れていやしないしるしを見ましょう。もし僕の言葉がでたらめに噴出しているというのならお許し下さい。僕はほとんど自分自身を制御できません――血管の中で血は止まったままです。あちらこちらと僕は幽霊のように彷徨っています！

《このように僕が自分の目的にこんなに近づいているのを見ていたまさにこのとき、あなたのご両親にあなたとの結婚の許しをえようという祝福の日が近づいてくるのを見ていたこのとき、ところがそれが、僕の運命が、僕を天国の扉の手前から計り知れない深淵の奥底まで落としてしまおうとは！

《許して下さい！　たった一言でいいです、まだ僕を愛している、と教えて下さい、この日曜日が僕の復活の日であると知るためにも……

《ああ、もしあなたが僕の目から流れ出る涙を見ることが出来るのなら！　あなたは僕を難なく許すことが出来るでしょう！

《おお、僕の愛しい人、最愛のヨゼフィーネ！

《僕たちがどしゃ降りの中を、ため息の小道を、歩いていた時、僕があなたに「下り坂がたどるのは昔の貞節の残骸の上だ」という詩句を引用した時、あなたが僕に言った言葉を僕はあなたに思い出させなければならないのですか？　あなたは僕に言った、「望みさえすればいい。人が望むことはすべて可能」と。おお、僕はこの言葉を錦の御旗のように捧げ持った。僕が考えてきたことすべてに、僕がやってきたことすべてに、その言葉は僕の導きの星だった。この言葉は僕の心の奥深くにしまい込まれたので、地獄の力をすべて合わせたところでかき消すことなどできやしない。そして今僕はそんなことすべて嘘っぱちだったと考えなければならないのか。そんなこと信じられやしない。そう、たしかに、僕は知っている。あなたはまだ僕を愛していることを！　あなたの天使のような顔、あなたの目が僕を騙しおおせることは出来ない――さもなければ主は、百合の花びらにベッラドンナの毒を隠したでしょう、しかもそれはただただ人間の心を砕くためにだけ！　おお、何て僕はあなたから遠いところにいるのだろう。あなたには僕の姿が見えないし、僕の話を聞き取れない。どうし



NII-Electronic Library Service

Meisei University



てときどきでも良いから僕はあなたに話しかけることが出来ないのだろう！　天よ、あなたの雄弁さを僕に貸してくれさえすれば！　そうすれば、あなたの心に忍び込んだ地獄の嘘を破壊してやることが出来るのだが！

《そう、たしかに、まだあなたは僕を愛している！　あなたはまだ僕を愛しているはずだ、そうでなければ、僕は、光を、天を、高貴なものをすべて、美しいものをすべて、その希望を捨てなければならない！

《おお、僕の優しい人、僕の愛する人、僕たちを隔てる大地を、山々を越えて僕の話を聞いて下さい！　こんなはなはだしい苦悩の中で僕はあなたに向かって叫ぶ！　命のしるしを、それだけでいい、僕に見せて下さい！

《月曜日まで待ちましょう、苦しみながら、絶望しながら。今日からその日までに何も来なければ、その時は、神よ、僕の哀れな魂に憐れみを！　おお、さらば、永久の別れ！　僕の命、僕の拠って立つ光、その光のために僕は生きてきた、さらば！　たった一言でいいのです、僕に手紙を書いて下さい。あなたの、死ぬほど忠実な、グスタフ　――　おお、お願いです、手紙を下さい。》

この絶望的な手紙にはもはや文学的な気取りや野心の痕跡はない。これは直接ヨゼフィーネに宛てられたものなのだろうか。切手と消印のない封筒はメリオンが手紙を直接彼女に手渡す役を担っていたがおそらくそうしなかったことを示しているように思われる。多分彼はこんなふうに仲介役を演じることに嫌気が差し始めていただろう。さらに彼は後述するが母を失ったばかりで、マーラーの火急の用事には答えることもしていない。さらに悪いことには、彼は娘の父に本当のことを言ってしまった。だから、それゆえ、マーラーはヨゼフィーネから、彼の望んだ命のしるしを受け取る代わりに、6月15日、以下のヨーゼフ・ポイスルの手紙を受け取る。

《メリオン先生の話によるとあなたは先生にいくつか質問をなさったが、今日先生は亡くなられた御母堂の埋葬で深い悲しみに沈んでいらっしゃるのであなたの質問に答えられる状態ではありません。

1）もしあなたが途絶えてしまった関係をもう一度修復するために、現在のあなたの生活様式を変えようと決心なさったのなら、私たちには辛いことです。思いがけず関係が修復したとしても、私たち両親は、歓迎しません。
2）率直に言ってそれは私たちにとってとても不快なことです。
3）私たちはもうどのような交際も許すわけにはいきません。
4）あなたがどのような態度をおとりになっても、私たちの意志に反して、もしあなたが、娘の行く道、娘自身が決めた道、娘が自分の利益で決めた道から娘を踏み外させようとなさるのなら、あなたは私たちの尊敬を即座に失うことになりましょう。

《私はあなたを尊敬することとあなたの真価を認めることを学びましたが、私を信じて下さい、状況が状況だけに、私の娘に関して、現在のそして将来の考えをどんなものでもきっぱりと諦めてくれることが正しいことです。娘には、あらゆる障害に打ち勝つことの出来るほどのまじめな愛情はありません、過去にもなかったし、将来もありはしないでしょう。

《あなたは間もなく人間としての、芸術家としての道を歩むことになりましょう。そしてすぐにあなた自身の若気の過ちに微笑むことでしょう。



NII-Electronic Library Service

Meisei University



《ご多幸でありますように。J. ポイスル》

この件に関して、この資料以後のどのようなものも残されていないが、マーラーは固執しても無益だと理解したことは明白であろう。ヨーゼフ・ポイスルが予測したように間もなくマーラーは彼のキャリアを踏み出し永遠のものと思われたこの初恋のことを忘れてしまう。ヨゼフィーネの方はユーリウス・ヴァルナーと結婚し、とても裕福な生活を送ることになる。この人物は彼女よりも20歳以上も年上で後にイーグラウ高校の校長になる。とはいえ、実際は、母親の厳しい監視下で書かれていたのだから、娘の手紙が理解させているよりも、マーラーとヨゼフィーネの関係はさらに進展していたと考えられないことはない。おそらくマーラーには、ヨゼフィーネが彼に従うだろうと希望しても良いそれなりの理由があったのだろう。成り行きがどうあったにしろ、両親がこれほどまでに容赦なく求婚者を切り捨ててしまってもそれは理解できるだろう。というのもこの求婚者は、ユダヤ人である上に、彼らの婿となるのに必要な資質のどれ一つも持たず、いずれにしても、この段階では、世に埋もれてしまう運命に定められているように見えるからだ。しかし後の世代にとっては、この危機状態に関する主要な関心事は、これによってマーラーは創作に熱中したということだ。ヨゼフィーネ・ポイスルに献呈されたピアノ伴奏による3つの歌曲は1880年の2月と3月に作曲され、さらに、マーラーにとって最初の重要な作品であり、長い間草稿状態であった後に初めて完成する作品『嘆きの歌』も作曲された[30]。これらはアルマ・マーラーのコレクションにあるいくつかの断片作品を除いて、今日私たちの知っているグスタフ・マーラーの最初の作品でもある。創作作品としては、これら現在わかっている作品に、失われた『北欧交響曲』が加わるが、おそらく未完成だった、というのは1879年12月14日クリスパー宛の手紙でマーラーはほのめかしている[31]。

不安、貧窮、ヨゼフィーネに対する愛、これらだけが当時マーラーの病的なまでに情緒不安だった理由ではない。もう一つ別の原因がある、ただし彼自身まだ気付いていない。彼がしている実際の仕事ではもう、日々彼の中で強まっていく活動の欲求を満足させることができないということだ。今日知られている通りマーラーのこの時代における作曲活動の成果は、時間が十分にあっただけに、十分豊富とはいえない。ピアノの家庭教師をしていたとしても、それはパン代を稼ぐ以外の何ものでもない。たしかに彼はピアノを完全にやめてしまったわけではないし、頻繁にベーゼンドルファー・ホールでリサイタルの伴奏をつとめてもいる[32]。テオドール・フィッシャーが語ったエピソードを信じれば、こういった活動は別に彼の興味をひいているわけではなかった。たとえば、ある夜、マーラーはある女性歌手の怒りを買ってしまった。というのは舞台上でマーラーが彼女の背後に回った時、不注意にも彼女のドレスの裾を踏みつけてしまった。またある夜は、彼はポーランドのヴァイオリニストの伴奏をつとめ、多分この奏者は下手だったのだろう、彼は舞台上であることをすっかり忘れ、深い瞑想に沈んでしまった。可哀相なソリストは彼を地上に連れ戻そうとして足で拍子をとらなければならなくなった。メーリッシャー・グレンツボテ紙もまたマーラーが参加した1879年4月24日イーグラウ劇場で行われた皇帝フランツ・ヨーゼフの銀婚式を祝うためのコンサートについて記事を書いている。出演したのは市のオーケストラと様々な合唱団の他、ソリストも何人かいた。彼らは報酬無しで協力を惜しまなかった。ソプラノとバスの二人の歌手とヴァイオリニストのジツカだったが、ズデネク・ネイエドリによるとこのヴァイオリニ



NII-Electronic Library Service

Meisei University



ストはマーラーの師の一人だった。マーラーはその晩の演奏会でリストの『ハンガリー狂詩曲』の一曲、シューマンの『フモレスケ』、シューベルトの『ピアノソナタイ短調』を演奏した[33]。

夏の間、マーラーはちょっとした職に就く。それは前年の夏にハンガリーのバウムガルテン家で就いていたものだ。そしてゼーラウでエミール・フロイントに再会することにり、数日間はイーグラウの両親のところで過ごす。秋にはウィーンに戻り、歌劇場からそう遠くないレンヴェーグでフーゴー・ヴォルフと一緒に住む（ここは後にマーラーが歌劇場監督になった時彼が住んだ住居のすぐ近くだ）[34]。続いて11月には市の反対側になるヴェーリングに引越す。ここは夏の間だけ住むイギリス風の別荘が集まっているところで、それゆえ、シーズンオフでは家賃が安かった。これほど遠いところに住んでみようと考えたのは詩人のリヒャルト・クラーリクの示唆があったことは確かだ。というのも彼の父は同じ別荘地区に別荘を持っていた。マーラーの借りた家具付き住居は《寝室、化粧室、玄関ホール、台所、屋根裏部屋、地下室[35]》であり、これら全部で月に15フローリンという低額であった。ところが残念なことにマーラーはこの比較的快適なところを長いこと利用することがなかった。というのは12月18日にクリスマス休暇を過ごすためにイーグラウに行ってしまう。この住居を《元旦まで料金を払ってある［素晴らしい］ピアノ》とともにヴォルフに明け渡してしまう。

11月12日ワーグナー協会はベーゼンドルファー・ホールでコンサートを開催した。これは多くの聴衆を惹きつけ、中にブルックナー、エプシュタイン、アントン・ドーア、ゲンスバハーがいた。プログラムにはリストの交響詩『理想』を二台のピアノ版で演奏するものがあり、これはフェリックス・モットルとハンス・バウムガルトナーによって演奏された。彼らは続いてブルックナーの『交響曲第3番』を一台のピアノで四手による演奏をした。これは今に残るマーラーの編曲によるものであることは間違いない。その後、理由はわからないが、マーラーはアントン・クリスパー、ハンス・ロット、ルドルフ・クルツィツァノフスキーとともにワーグナー協会を去る。そして間もなくマーラーはヴォルフや二人のクルツィツァノフスキー兄弟とともにエンゲルベルト・ペルナーストルファーを中心に組織されたグループの会員になる。この人物はオーストリア社会主義の基礎を作った若い聡明な人物である。（以下次号）

［付録］

ヨゼフィーネ・ポイスルのために書かれたマーラーの詩

忘れられた愛

私の心には何という悲しみが！　世界には何という空虚が！
私の期待の何という長さ！
おお、谷から谷へと、遠景が
永遠に積み上がっていくように！
私の優しい愛よ！　これが最後か!?



NII-Electronic Library Service

Meisei University



嗚呼、この苦しみは
永遠に私の心を蝕まなければならないのか？

何という純粋で忠実な輝きがかつて
あの人の見つめる瞳の中で輝いたことか！
私は永久に旅を諦めた
冬の策謀にもかかわらず！
そして、春が去ってしまうと
私の愛はミルテの花冠で
あの人のブロンドの髪を飾った！

私の旅の杖よ！　今日もまた
おまえの心の奥から出でよ！
おまえは長いこと眠っている！　そら、いまや、支度だ！
私がおまえを目覚めさせるのだから！
長い時にわたって私は愛の苦しみに耐えてきた！
しかし大地はかくも広い　——
行こう、来るのだ、私の忠実な杖よ！

丘と谷がやさしく頬笑む
花々の波の上で！
春がそこを通ったのだから
かくもやさしい笑みを浮かべながら！
そしていたるところに花が咲き乱れ
そしていたるところに小さな十字架が立ち並び　——
嘘はなかった！

21）Rudolf Stefan Hoffmann が初めてマーラーの未発表歌曲の詩を公表した（Neues Wiener Journal, 1921 年 12 月 21 日）。現在これはロゼー・コレクション所蔵。その歌曲の献呈された人を明らかにしたのはホフマンである。Josefa Poisl はイーグラウの郵便局長、Josef Poisl（1831 年モラヴィアのローレで生誕）の 6 人の子供の一人、彼女はマーラーと同年で、ノイザティツ（ハンガリー）で生まれる。彼女よりも二十歳年上のイーグラウ高校教師 Julius Wallner と結婚。この人物は後にこの高校の校長に任命される。

22）1880 年 2 月『春に』という歌曲の詩に同じ対句がある。「私はめくらではないが見えない。私には暗くはないが明るくない。」

23）*AMS*［未刊行資料アルマ・マーラー『グスタフ・マーラーとの生活』］でこれらの手紙の写しの前にタイプで書かれた注に従うと、マーラーの手紙の中でファンニとヨゼフィーネ宛の手紙だけが手書きのまま残された。

24）日付のない手紙だが 3 月はじめに書かれたものと結論される。

25）この詩の全文は文末に掲載される。マーラーはクリスパーに同じ時期に書かれた手紙に *Ballade vom blonden und braunen Reitersmann* と題された詩が送られる。この詩は細かい点を除けば『嘆きの歌』オリジナル版の第一部である *Waldmärchen* のそれである。

26）『春に』『冬の歌』『春の踊り』。

27）上述したシュタイナー宛の手紙［前号に掲載］参照。Franz Melion は 1877 年から 1880 年までイーグラウ



NII-Electronic Library Service

Meisei University



の高校で補助教員をしていた。

28) この葉書ではポイスルの名はないがJとAの2つのイニシャルが書かれる。葉書の日付からマーラーが問題とする人物に違いない。

29) *AMS* にあるこの電報の写しには《*Ich schreiben*》とあるが、意味をなさない。おそらく《*Ihr schreiben*》(《彼女らに手紙を書く》)と書かれたものだろう。

30) 第一部の草稿『吟遊詩人』は、1880年3月21日の日付を持ち、現在ウィーン国立図書館にある。三部からなる原典版では『吟遊詩人』は第二部。

31) 上述、付録参照。

32) このホールは古い記録をとっておかなかったので残念なことに当時マーラーが伴奏した演奏会やリサイタルの日時やプログラムが何であったか知ることは出来ない。

33) この演奏会のプログラムはKurt Blaukopf: *Mahler: sein Leben, sein Werk und seiner Welt in Zeitgenössischen Bildern und Texten*(資料番号39)にある。マーラーは他にも歌曲の伴奏をつとめた。

34) Rennweg 3, Tür 10 b(1879年9月22日のクリスパー宛の手紙参照)。

35) フーゴー・ヴォルフの手紙による(*Eine Persönlichkeit in Briefen, Familenbriefe*, Leipzig, 1912, p. 45)。この手紙によってクリスパーの手紙の1つ、12月14日とあって年のないものの年代を決定できる。

Author: Henry-Louis de La Grange
Title: 5 Les années intermédiares dans Gustav MAHLER I.
© 1979 Librairie Arthème FAYARD, édition originale revue et augmentée.



NII-Electronic Library Service